

# しらおか歴史物知りシート

No.2-1

こもれびの森・歴史資料展示室

## 【高麗経澄軍忠状】

市内に本拠地を置く中世武士団鬼窪氏の動向をうかがうことのできる文献は、あまり多く残されてはいません。その中で、14世紀半ばの鬼窪氏の様子を知ることのできる資料のひとつに「高麗経澄軍忠状(日高市町田家文書・県指定文化財)」があります。

この古文書から、鬼窪氏や白岡の地の果たした役割が浮かび上がってきます。

足利尊氏の弟直義と尊氏の腹心で執事職にあつた高師直との対立に端を発した内紛が関東の武士団を巻き込んだ戦乱に発展する。これが「観応の擾乱」といわれるものである。写真の軍忠状の主「高麗経澄」や鬼窪一族は、尊氏方の薬師寺加賀入道に従つて、観応二年(一三五二)八月、「鬼窪」で挙兵したことがわかる。羽祢倉(さいたま市羽根倉河岸付近)

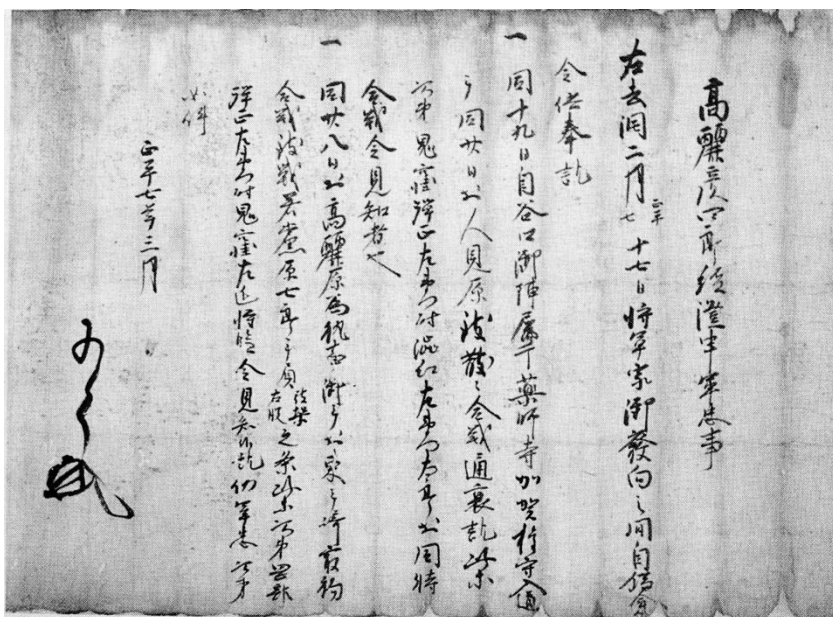


や阿須垣原(杉並区阿佐ヶ谷付近)、符中(府中市)、小沢城(稲城市)へと勝利しながら進軍しているところを見ると、ある程度の規模の軍勢であつたものと推測できる。十二月十七日に旗揚げし、翌十八日に出立した場所は、他ならぬ「鬼窪」である。鬼窪は地名としての側面を持つとともに鬼窪氏の居館をも指していたのではないだろうか。

八幡太郎義家が、奥州征伐の折に戦勝祈願に立ち寄つたという白岡八幡宮と隣接する入耕地館跡は年代的にも位置的にもこの古文書と合致する。鬼窪の地が規模の大きな軍勢が集結するに当たって便がよく、これを収容できる能力を有する軍事拠点であつたことを裏付ける史料であるとも言えることができよう。

- 高麗彦四郎経澄軍忠の事
- 一、去年(観応)八月、鎌倉殿御教書を下し給ひ、下野国宇都宮に馳せ越し、忠節を致しおはんぬ
  - 一、薬師寺加賀入道宇都宮に下向の間、対面を遂げ、上相民部大輔を誅伐せしむべき由、条々談合致しおはんぬ
  - 一、同十二月十七日、鬼窪に於いて御旗を揚げおはんぬ
  - 一、同十八日、鬼窪より打ち立ち、符中へ罷り向うの処、同十九日、羽祢倉において合戦の時、難波田九郎三郎以下兇徒等打ち捕り候らひおはんぬ
  - 一、同夜阿須垣原に於いて取陣の処、御敵吉江新左衛門尉寄せ来るの間、散々合戦致すの処、薬師寺中務丞見知せしめおはんぬ
  - 一、同廿日、符中に押し寄せ、御敵等追い散らし、小沢城を焼き払いおはんぬ
  - 一、同廿九日、足柄山に於いて御敵等追い落としおはんぬ
  - 一、今年正月一日、伊豆国府に馳せ参り、鎌倉に至り御供仕りおはんぬ
- 右軍忠の次第斯の如し
- 正平七年正月 日

承りおはんぬ(花押)



高麗彦四郎経澄申す軍忠の事

右去閏二月十七日將軍家御發向し同自備會

會供奉札

一 同十九日自谷口御陣屬下葉所寺加賀權入道

同廿日人見原渡散會致通衰乱以

不中鬼窪窪正左衛門尉見知者

會致通衰乱以

一 同廿八日高麗原為親和漸少の家より

會致通衰乱以

浮云云云鬼窪窪正左衛門尉見知者

正平七年三月

めい

高麗彦四郎経澄申す軍忠の事

右、去る閏二月正平十七日、將軍家御発向の間、鎌倉より

供奉せしめおはんぬ

二、同十九日、谷口御陣より、葉師寺加賀權入道が手に属し、

同廿日、人見原において散々合戦致し、裏を通しおはんぬ

此等の次第、鬼窪窪正左衛門、渋江左衛門太郎、同時の合

戦に於いて、見知せしむるもの也

一、同廿八日、高麗原に於いて執事の御手として、東手崎にお

右股を突かる

いて最初の合戦 戦い致し、若党原七郎手負

らひおはんぬ仍って軍忠の次第件の如し

正平七年三月 日

承りおはんぬ (花押)

\*正平七年 觀応三・文和元年 (一三五二) 正平は南朝年号

武蔵野合戦における高麗経澄の動向

足利尊氏と直義の兄弟喧嘩に端を発した騒乱は、これに乗じた南朝方の新田氏の上野での挙兵や信濃での宗良親王を奉じた諏訪氏の蜂起を招く。さらに直義方の上杉憲顕・能憲・三浦氏、石塔氏等が挙兵、これに中先代の乱の北条時行が加わり騒然とした状況となった。

足利尊氏はこれを抑えるため、関東各地に動員を命じ、武蔵武士もこれに応じて従軍している。

鬼窪氏とともに名前の見える、渋江左衛門太郎や岡部弾正左衛門尉も埼玉県ゆかりの武蔵武士である。特に渋江氏は鬼窪氏と同じ野与党に属す同族である。

従軍した武蔵武士は、高麗経澄のように戦功を示した「軍忠状」を提出し、功績に見合った恩賞を得ている。高麗経澄も尊氏から、高麗郡内に領地を与えられている。おそらく、鬼窪弾正左衛門や鬼窪左近将監らも戦功に応じた褒賞を得たものと推測される。

鬼窪氏の動向を直接示す史料は残されていないが、約二十年後の応安三年(一三七〇)に記された義堂周信の日記『空華日用工夫略集』の中に鎌倉府の主要な役職についていたと思われる鬼窪修理亮という人物に関する記述がみられる。鬼窪氏の重用が武蔵野合戦に由来するものかどうかはわからないが、何らかの理由がなければ、取立てや厚い信任はあり得ないであろう。

どのようなドラマがあったのか、想像を膨らませるのも歴史の楽しみ方かも知れない。

前掲の軍忠状の二か月後、もうひとつの「高麗経澄軍忠状」が出されている。このとき、尊氏勢は虚を突かれ一時鎌倉を退去する。すぐに軍勢を建て直し反撃に移る。谷口で葉師寺加賀權入道(公義)と合流した経澄は、人見原(多摩郡)、高麗原(日高市)などで奮戦している。後に「武蔵野合戦」と呼ばれる激戦である。

高麗経澄の戦いぶりを一緒に戦っていて知っていると思われる武將に「鬼窪弾正左衛門」や「鬼窪左近将監」がいることがわかる。